

令和4年4月  
一橋大学

令和4年度一橋大学一般選抜（前期日程）第二次試験

出題の意図等 【国語】

## 問題一

現代文の読解力を試す問題である。自分が直接的に経験していない過去を「歴史」とすれば、それを認識するのは、自分の経験を蓄積するなかでのことである。一方で、「歴史」にはさまざまなバイアスがかかっているのだが、そのことに無自覚な場合が多い。そうしたバイアスについて自覚的になることが「歴史的に考える」ことなのだと論じた文章である。

問い一 内容を理解した上で語彙を的確に選択し、かつ漢字を正確に書く能力をみる。解答例は、A「痕跡」、B「純然」、C「感銘」、D「傲慢」、E「偏見」。

問い二 筆者が「歴史」をどうとらえているかを問う。自分の経験が経験外の現実とつながると想像できることがそれにあたる。

問い三 「歴史的に考える」ことが教育の場で困難な理由についての筆者の見解を問う。入学試験のあり方に問題があるとしている点に留意する。

問い四 「歴史的に考える」ことを筆者がどう考えているかを問う。バイアスの存在とそれを相対化する力の重要性が強調されている。

## 問題二

近世は現代につながる出発点である近代直前の時代で、日本が独自に社会や文化を育んできた最後の時代である。その点において今日の日本を形成する土台ともなった時代である。近現代の日本を本質的に考察する上で視野にいれておくべき時代であり、近世の人々の人間観、人生観を知るうえで問題にとりあげた『続近世畸人伝』は正編である『近世畸人伝』と並んでその格好のテキストといえる。仏教観に基づきすべての命は等しい価値をもつという当時の人々の生命観をうかがうことのできる文章である。

問い一 現代でも使用されることのある言葉の意味について問う。解答例はA「はかない命」、B「あご」、C「終日」などである。

問い二 直前の文章との関係を理解し、自らの言葉で簡潔に説明する能力を問う。人間の生きる糧になるために他の生き物が存在するとするならば、蚤や虱などのために

人間が存在することにもなるという矛盾について批判しているのであり、人間中心に物事を解釈していることの批判であることを簡潔に述べることができるかを問う問題である。

問い三 前半のエピソードを踏まえつつ、文章全体の意味、即ち人間を含め、すべての命は等しい価値を持つという認識の上で人はどのようにふるまわなければならないかを簡潔にまとめなければならない。文章の構成力、作文力を問う問題である。

### 問題三

文章全体の論理を正確に読み取る読解力と、それを二〇〇字で要約する文章表現力とを問うことを意図している。素材となる文章では、人間と動物との相違点について、人間は事実の世界だけではなく、意味の世界と双方のなかで生きていることを指摘し、そのうえで人間にとっての空間は意味空間であり、生活を解釈する場であるという点において主体的な空間であることが述べられている。この文章の内容を二〇〇字の解答制限のなかで要約するには、ただ単に論点を列挙するだけでは不十分であり、それらを元の文章の論理構造に沿って再構成したうえで、新たな文章として表現する必要がある。